

中国語を母語とする日本語学習者における 「並列節のテ」の誤用に関する考察

— 過剰使用と不使用を中心に —

廖 琳
(2022年10月7日受理)

Misuse of the *te* form in parallel clauses by Chinese-speaking learners of Japanese:
Non-use and over-use

Liao Lin

Abstract: This study investigates patterns of misuse and overuse of the *te* form in parallel clauses. The data were extracted from the YUK Tagged Corpus by Chinese learners of Japanese. The following results were obtained: (1) Overuse is likely to occur, as overuse appears about 12 times as much as non-use. However, as a stylistic tendency, there is a common feature concentrated on the *da /dearu* style. (2) Misuse patterns of overuse include 3 types and 5 categories. For example: parallel (“antecedent and consequent” and “separate presentation”), succession (“no continuity before or after”), and contrast (“lack of unity by theme” and “formal similarity”), but more than 60% are in parallel. (3) As for misuse patterns of non-use, there are patterns related to the predicate of the antecedent, such as “function word expression” and “one beat of the conjunctive form.” There are also things related to semantic use, such as the “catching method of unity” and the “causal relationship.” Non-use due to the “catching method of unity” accounts for most misuse cases. (4) For overuse and non-use, there are many cases of misuse where the reading point is a formal tendency. This reading point indicates that the learner is aware there is a break before and after the reading point. At that time, overuse involves the *te* form plus the reading point, and the learner has a break between sections at the reading point. At the same time, both are connected by the *te* form, which represents them. Non-use indicates that the learner cannot judge a situation where “continuation of continuous use” and the *te* form are mixed, and the *te* form cannot be used.

Key words: *te*-form, overuse, non-use, *te*-form+reading point

キーワード：並列節のテ、過剰使用、不使用、テ形+読点

はじめに

草薙 (1985: 22) は、「テ形」には動詞と動詞、あるいは節と節を結びつける文法的機能を持っていると述べている。半藤 (2006: 14) は、文を繋げる「テ形」を「並列節のテ」と名付けている。この節と節を繋ぐ「テ形」¹⁾

は「連用中止」²⁾と類似した機能を持っており、文体上の違いこそあれ、接続関係の相違はほとんどないものとして扱われることが多い。

于 (2017: 3) が述べるように誤用を日本語母語話者の表現習慣に合わない用法という観点から、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.10 (以下、『YUK コーパス』)を見ると、そこには「並列節のテ」の誤用例として次のようなものが認められる。

本論文は、査読付き論文である。

- (1) 特別活動の設定は子供に楽しませながら教え <*て→○>, 楽しく成長させる。
 (2) 高校の時テレビで大龍隆司さんを見て始め <*○→て>, 日本人を真面目に考えました。

(1)と(2)は節と節の間に発生している「並列節のテ」の誤用であり、(1)は「テ」の過剰使用、(2)は「テ」の不使用の例である。いずれも前後件の繋がりが不自然なため誤用と判断されたものである。これらの例が示すように「テ形」と「連用中止」の用法に違いがないとは言えない。

本稿の目的は、『YUK コーパス』から抽出した「並列節のテ」の過剰使用と不使用を分析し、誤用の実態及び誤用の発生要因を明らかにすることにある。第1節では、先行研究を述べる。第2節では、資料を紹介する。第3節では、誤用の実態を考察する。第4節では、誤用を過剰使用と不使用の順に考察する。そして、第5節では本稿で明らかになったことをまとめる。

1 先行研究

節と節の間の「テ形」について、先行研究は主に「テ形」と「連用中止」の使い分け、日本語学習者の誤用といった二つの観点から論じている。

1.1 「テ形」と「連用中止」の使い分け

「テ形」と「連用中止」の使い分けについては、生越(1988)、林(2007)、益岡(2013)と中俣(2015)が論じている。

生越(1988)は、両者の使い分けについて、前後件が同時に起こる同時的用法と前後件が継起的に起こる継起的用法に分けて論じている。同時的用法については、「テ形」は前後件一体となって成立している「前件かつ後件」の関係にある、またはテーマ主導によって前後件の一体性が示されている「テーマによる一体性」である場合に使用される。他方、「連用形」は前後件がそれぞれ独立している「前件そのほかに後件」の関係にある、または前後件の述語が同じあるいは相反する語の場合に使用される。そして、継起的用法については、「テ形」の文では前後件は連続して起こるが、「連用形」の文では前後件は時間的間隔をおいて起こる。更に、因果関係がある場合、後件に感情に関係する動詞、形容詞が来る時、また「連用形」が一音節になる動詞(「見る」、「来る」など)が前件の述語になる時、「テ形」が用いられると述べている。

林(2007)は、新聞・論述文・小説の三つの文章タイプを資料とし、「連用形」の時に一拍になる動詞、「を

通じて」などの機能語的表現などの場合には、「テ形」が偏って出現する。他方、「ある」、「される」などの副詞的用法の場合には、「連用形」が偏って出現すると述べている。

益岡(2013)は、「中立形」接続は並列を基本とし、場合によって継起・因果の意味を含意する。他方、「テ形」接続は並列・時間継起・因果・容態の意味を表す。また、継起・因果の領域では「テ形」接続が優先され、並列の領域では「中立形」接続が優先されると述べている。

中俣(2015)は、「テ」は同一場面に存在する事態同士を結合できる「結合提示」であり、前後件の述語が同形式である時には使用しにくい。他方、「連用形」は同一場面に存在しない事態であっても並列できる「分離提示」であることと、前後件の述語が同形式であっても使用できることを述べている。

先行研究に従い、「テ形」と「連用中止」の異同点をまとめると、次頁の表1のようになる。

1.2 日本語学習者の誤用

日本語学習者の誤用については、先行研究では主に過剰使用に注目しており、不使用に注目したものはわずかしかない。過剰使用について論じたものとしては、田代(1995)、中野(1997)と市川(1997)がある。田代(1995)は、中上級日本語学習者の文章表現の問題点を分析し、中国語話者は「テ」への偏りが見られ、一文中で主語が交替する場合にも「テ」を用い、それが不自然さにつながっていると指摘している。中野(1997)は、日本人学生と香港・韓国の大学生を対象に、日本語母語話者と日本語学習者による「テ形」接続と「連用形」接続の使用の使い分けの実態を論じている。日本語学習者は両形式の内、「テ形」を使いすぎる傾向にあることを明らかにした上で、その理由として、日本語学習者が「テ形」の意味機能は多岐に渡り、「テ形」を使用すれば間違いは避けられると思っているという点を指摘している。市川(1997)は、並列(継起)を表す動詞「テ」で並べ上げる場合、「～テ～テ～テ」と羅列すればよいと思ってしまう学習者がいると指摘している。市川(1997)は不使用についても論じ、継起と付帯用法の場合、「テ形」を使用しないことを指摘している。

しかし、中国語を母語とする日本語学習者(以下、学習者)によって生じた誤用にいかなるパターンがあるのか、発生要因は何であるのかについては未解決のままである。これらを明らかにするには、前後の繋がりなどの分析なども視野に入れ、学習者の視点からの考察が求められる。

表1 「テ形」と「連用中止」の異同点
 (生越 (1988), 林 (2007), 益岡 (2013), 中俣 (2015) を参考に作成)

	テ形	連用中止
生越 (1988)	同時的用法: ・前後件は一体となって成立している (「前件かつ後件」) ・テーマ主導により前後件の一体性が示される (「テーマによる一体性」)	同時的用法: ・前後件はそれぞれ独立している (「前件そのほか後件」) ・前後件の述語が同じあるいは相反する。 (「形式的類似性」)
	継起的用法: ・前後件は連続して起こる (「前後に連続性あり」) ・因果関係があり、感情の述語が後件に来る (「因果関係あり」)	継起的用法: ・前後件は時間的間隔をおいて起こる (「前後に連続性なし」)
	音節: ・連用形が一音節になる動詞が前件の述語になる (「連用形が一音節」)	
林 (2007)	連用形の時に一拍になるもの (「連用形が一音節」)	「ある」、「される」などの副詞的用法 (「副詞的用法」)
	「～を通じて」などの機能語的表現 (「機能語的表現」)	
益岡 (2013)	因果の領域でテ形が優先 (「因果関係あり」)	並列の領域で連用中止が優先 (「並列で中止形が優先」)
中俣 (2015)	同一場面に存在する二つの事態を結合する (「結合提示」)	同一場面に存在しない二つの事態を結合する (「分離提示」) 前後件の述語が同形式であっても使用できる (「形式的類似性」)

2 資料

本稿では『YUK コーパス』を利用する。これは、関西学院大学の于康研究室によって開発された大型タグ付きコーパスである。中国の大学60校からの大学で日本語を第一外国語として履修する学生及び院生が書いた日本語の作文や論文などが、日本語教育に携わる日本語母語話者によって添削されている。

誤用例の抽出方法としては、まず『YUK コーパス』から「テ形」を含む誤用例を抽出し、次にその誤用例から「並列節のテ」に関わる誤用例を抽出した。

3 「並列節のテ」の誤用実態

『YUK コーパス』から抽出した「並列節のテ」の誤用例は大きく二種類に分けられる。

「*○→テ」= 「不使用」: 「テ形」を使用しなければならないにも関わらず、学習者が「連用中止」を用いることによって生じた誤用。

「*テ→○」= 「過剰使用」: 「連用中止」を使用しなければならないにも関わらず、学習者が「テ形」

を使用することによって生じた誤用。

これら二種類の誤用は『YUK コーパス』にあわせて326例あり、その内訳は不使用が25例、過剰使用が301例である。文体（「だ・である体」のような常体と「です・ます体」のような敬体）から分類すると、不使用25例の内訳は「です・ます体」が9例、「だ・である体」が16例、過剰使用301例の内訳は「です・ます体」が39例、「だ・である体」が262例となる。誤用例数とその割合を示したものが図1である。(「n」は総例数を表す。以下同様。)

図1のように「並列節のテ」における誤用は過剰使用の301例(92.33%)が不使用の25例(7.67%)を大幅に上回っており、過剰使用が発生しやすいと言える。他方で、過剰使用であれ、不使用であれ、誤用例は「だ・である体」に集中している。不使用と過剰使用にはそれぞれに特徴があるため、本稿では不使用と過剰使用両者を考察の対象にする。過剰使用、不使用との例数が多い順に論じる。

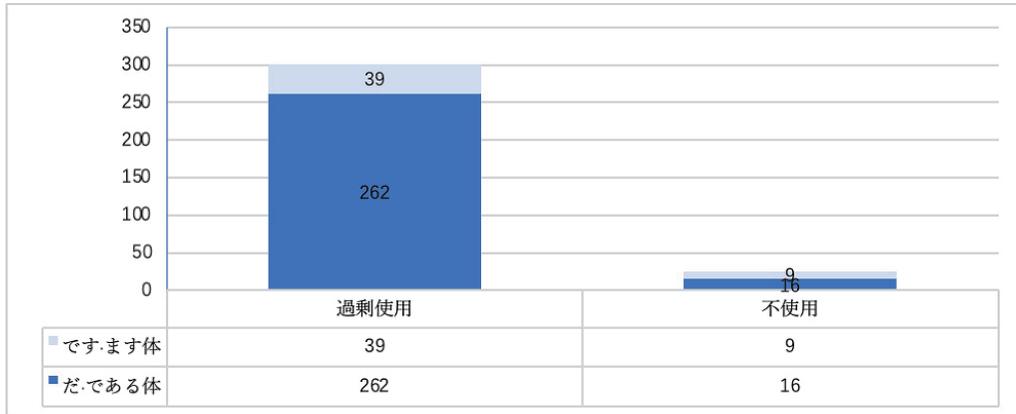


図1 「並列節のテ」の誤用の実態 (n=326)

4 「並列節のテ」の誤用の詳細

4.1 過剰使用

4.1.1 過剰使用のスケッチ

学習者がいかなる状況で「テ形」を過剰に使っているのか、スケッチをしておく。(3)～(7)を見よう。森田(1989)の意味分類に従い、過剰使用の例を分類すると、(3)と(4)は並列、(5)は継起、(6)と(7)は対比の誤用例となる。

- (3) 小鳥は楽しそうに歌を < * 歌って → 歌い >, 小川も軽快に流れています³⁾。
- (4) 土地ならではの駅弁が数多く生まれ、様々な分野に経営を多角化している駅弁屋が増え < * て → ○ >, 通信販売をする駅弁業者も多くなった。
- (5) それから、「～ないか?」と「～じゃないか?」二つの否定疑問文を確信の強さについて比べ < * て → ○ >, それぞれの表現の相違点を明らかにし、否定疑問文の意味機能を詳しく分析する。
- (6) 人間の社会への貢献や責任と社会の人間への承認や満足という二つの方面があり、前者は「社会価値」と言われ < * て → ○ >, 後者は「自我価値」と呼ばれている。
- (7) ある若者は「他人の目を意識せずに好きなことをする」と < * 思って → 思い >, ある若者は「他人の目がある公共の場ではやっってはいけないことがある」と思っている。

(3)は「小鳥が歌を歌う」と「小川も流れている」といった二つの事態が別々の場面で行われている。中俣(2015)が言う「分離提示」であり、「テ形」の使用は不自然である。(4)は「駅弁屋が増えた」と「駅

弁業者も多くなった」ことがそれぞれ独立した状況のもとで、「駅弁」という主題を説明している。生越(1988)が言う「前件そのほかに後件」であり、「テ形」の使用は不自然である。(5)は「比べる」と「明らかにする」の間には時間差があり、生越(1988)が言う「前後に連続性なし」であるため、「テ形」の使用は不自然である。(6)は「前者」と「後者」で一体化されるテーマが欠けており、生越(1988)が言う「テーマによる一体性」ではない⁴⁾(以下、「テーマによる一体性の欠如」)ため、「テ形」の使用は不自然である。(7)は前件の「思う」と後件の「思っている」が、生越(1988)、中俣(2015)が言う「形式的類似性」であり、「テ形」の使用は不自然である。

以上の誤用実態から、「並列節のテ」の過剰使用の誤用パターンは以下の3種類に分けることができる。

- ① 並列: 「分離提示」と「前件そのほかに後件」
- ② 継起: 「前後に連続性なし」
- ③ 対比: 「テーマによる一体性の欠如」と「形式的類似性」

4.1.2 過剰使用の詳細

前節では、「並列節のテ」の過剰使用の誤用パターンをスケッチした。個々の誤用パターンの実態を示すと、表2ようになる。

表2に示した通り、「並列節のテ」の過剰使用301例の内、並列が191例で最も多く、過剰使用の6割以上を占めている。その並列の内訳は「前件そのほかに後件」が149例(49.51%)、「分離提示」が42例(13.94%)である。そのほかの継起においては、「前後に連続性なし」が91例(30.23%)、対比においては、「テーマによる一体性の欠如」が11例(3.65%)、「形式的類似性」

表2 「並列節のテ」の過剰使用における誤用のパターンの詳細 (n=301)

並列 191 (63.45%)		継起 91 (30.23%)	対比 19 (6.32%)	
前件そのほかに後件	分離提示	前後に連続性なし	テーマによる一体性の欠如	形式的類似性
149 (49.51%)	42 (13.94%)	91 (30.23%)	11 (3.65%)	8 (2.67%)

が8例(2.67%)認められる。(3)は「前件そのほかに後件」, (4)は「分離提示」, (5)は「前後に連続性なし」, (6)は「テーマによる一体性の欠如」, (7)は「形式的類似性」の例であるが、その他の例としては(8)~(17)のようなものがある。

「前件そのほかに後件」

- (8) 和語や漢語は日本人の生活習慣と風俗によって生まれ＜*て→○＞, 固有の伝統を表現している。
- (9) 日本も唐と通交して漢字・儒教・漢訳仏教などの諸文化を共有し＜*て→○＞, 唐の周辺諸国とともに東アジア文化圏を形成した。

「分離提示」

- (10) 空は気持ちよく＜*晴れ渡って→晴れ渡り＞, 庭には花がいっぱい咲いている。
- (11) 食事の後, 姉はリビングで本を＜*読んで→読み＞, 私は自分の部屋で映画を見た。

「前後に連続性なし」

- (12) メディアによって, 世間に知れ渡るようになってからその意味がどんどん拡大し＜*て→○＞, 混乱するようになった。
- (13) 1945年8月, 第二次世界大戦が終結し＜*て→○＞, 日本各地は住宅・水道・下水道・電力・ガスなどの様々な復興作業に追われることになる。

「テーマによる一体性の欠如」

- (14) でも, もし自分が死を避けられないことと知ったら, 生を諦め＜*て→○＞, 死を受け入れる。
- (15) 日本語の「あるものに抱く感情の高ぶり」と少し＜*違って→違い＞, 中国語の方は「可愛い」の意味がよりふさわしいと思われる。

「形式的類似性」

- (16) 簡単に言えば, 陰陽思想は奇数を陽とし＜*て→○＞, 縁起のいい数字であり, 偶数が陰として縁起の悪い数字であると考えられる。
- (17) ある若者は「他人の目を意識せずに好きなこと

をする」と＜*思っ→思い＞, ある若者は「他人の目がある公共の場ではやってはいけないことがある」と思っている。

「連用中止」は「テ形」より書き言葉的である(市川 1997: 452)。そのため、「だ・である体」の文では「テ形」の使用は不自然となる。過剰使用の誤用例が「だ・である体」に集中しているのは、そうした文体上の事情が大きく関わっていると思われる。

4.1.3 過剰使用における形式上の傾向

(1), (3) から (17) まではいずれも「テ形」の後ろに読点の「,」が打たれている。過剰使用の例は「テ形」の後ろに読点の「,」を打つかどうかによって異なる傾向が認められ, 全体の9割以上に読点の「,」が打たれている。その詳細を示すと, 表3のようになる。(Pは前件を示し, Qは後件を示す)。

表3 「並列節のテ」の過剰使用における形式上の傾向 (n=301)

「P, Q」	「P Q」
272 (90.37%)	29 (9.63%)

表3に示した通り, 過剰使用においては, 読点を使用した「P, Q」が272例(90.37%)認められ, 読点を使用していない「P Q」が29例(9.63%)しか認められない。この数値の違いは注目してよい。「P, Q」の例は(1), (3) から (17) までに示したとおりである。「P Q」の例を(18)と(19)に挙げておく。

- (18) 原始の宗教の信仰段階での日本の統治者も仏教が国家を鎮護し, 幸福を＜*祈って→祈り＞災害から免れる, 政敵を倒し, 多くの現世利益を与えると考えた。
- (19) 私は日本に留学してバイトでスーパーのレジをしているとき, 一つの出来事に＜*出会う→出会い＞初めて日本人の「恩」に関する敏感な心を感じた。

節と節の間に「テ形」のみならず、読点の「,」を使用するという傾向が見られる。中国語では接続を表す形式がなくても文をつなぐことができるため、「テ」の使用範囲広くなる可能性がある(田代 1995)。また、用言の活用形や接続助詞には節と節とのつながりを明確にさせることができる日本語とは異なり、中国語の文は読点によって切れるところが示される。そのため、「テ形+読点」の使用は、学習者が読点で節と節との間に区切りがあると捉えているとともに、同時に「テ形」でその両者を繋げようとしていることを表しているのであろう。

4.1.4 まとめ

「並列節のテ」の過剰使用について、次のようなことが言える。

- ① 固い文章の「だ・である体」が使用される「テ形」は、文体性から節と節の間の繋がりを適切に捉えていないと見做させるため、誤用とされる。
- ② その際、誤用には並列(「前件そのほかに後件」と「分離提示」)、継起(「前後に連続性なし」)、対比(「テーマによる一体性の欠如」と「形式的類似性」)があるが、誤用例全体の6割以上は並列が占める。
- ③ 学習者は「テ形+読点」を使用することで、「読点」で節と節との間に区切りがあること、「テ形」でその両者が繋がっていることを表している。

4.2 不使用

4.2.1 不使用のスケッチ

「並列節のテ」の不使用は学習者が使った「連用中止」ではなく、「テ形」のほうが自然なため、誤用とされた例である。学習者がどのような状況の下で「テ形」を使わないのか、スケッチしておく。(20)～(23)を見よう。

- (20) シェア自転車は2014年からだったが、三年も経たずに、すっかり国民の日常生活に入り込んでき $\leq * \bigcirc \rightarrow \geq$ 、総理大臣にも褒められた創意産業になりました。
- (21) 兵庫県国際交流会館の先生たちが去年の10月から、今日のために、いろいろ準備してくれ $\leq * \bigcirc \rightarrow \geq$ 、すごく感動した。
- (22) 色彩語は客観的な世界を表すことを通じ $\leq * \bigcirc \rightarrow \geq$ 、作者の感情を反映し、読者の感想や連想を呼び起こすことができる。
- (23) まずは先行研究を調べまとめ、次に、青空文庫などのネットワークとコーパスを利用し $\leq * \bigcirc \rightarrow \geq$

$\bigcirc \rightarrow \geq$ 、例文を探し、最後に、2つの可能表現の種類、意味を比べることにより、その内面的な理由を探り出す。

(20)は、「来る」が「連用形が一拍になるもの」であるため、誤用となる。(21)は、「色々準備してくれる」が「感動した」理由として認められ、前後が「因果関係あり」であるため、誤用とされる。(22)の「を通じて」は「機能語的表現」であり、誤用と認められる。(23)の「まず」、「次に」と「最後に」の三つの部分はそれぞれ一つのまとまりと見なすことができる。「テ形」節は「ひとまとまり」を作る働きがある(三原 2011)。また、(23)のような固い文では「連用中止」で区切りをつけることが望ましいが、一方の接続形式のみに偏ると、前後関係がうまく繋がらない(吉永 2012)ため、誤用となる。

「並列節のテ」の不使用については、(20)のような「連用形が一拍になるもの」、(21)のような「因果関係あり」、(22)のような「機能語的表現」、(23)のようなまとまりの捉え方(以下、「まとまりの捉え方」)が誤用とされる要因である。そのうち、「連用形が一拍になるもの」と「機能語的表現」は前件の述語に関するものであり、他方、「まとまりの捉え方」と「因果関係あり」は意味用法に関するものである。「テ形」が必須となるのは「連用形が一拍になるもの」のみであり、ほかの「機能語的表現」、「まとまりの捉え方」と「因果関係あり」は「テ形」を必要とされていない場合がある。

4.2.2 不使用の詳細

「並列節のテ」の不使用の25例の誤用パターンは「連用形が一拍になるもの」、「因果関係あり」、「機能語的表現」、「まとまりの捉え方」と言う四つに分けることができる。その詳細を示すと、表4ようになる。

表4に示した通り、「まとまりの捉え方」が13例(52%)、「機能語的表現」が5例(20%)、「連用形が一拍になるもの」が4例(16%)、「因果関係あり」が3例(12%)認められる。(20)～(21)がそれらの例であるが、その他の例としては(24)～(31)のようなものがある。

「まとまりの捉え方」

- (24) 民主主義の影響を受け $\leq * \bigcirc \rightarrow \geq$ 、男尊女卑に反対し、男女平等を主張する人もますます多くなりつつある。
- (25) 会社が専門的な部門を設立し $\leq * \bigcirc \rightarrow \geq$ 、派遣社員に対する具体的な人資源管理をする

表4 「並列節のテ」における誤用のパターン (n=25)

まとまりの捉え方	機能語的表現	連用形が一拍になるもの	因果関係あり
13 (52%)	5 (20%)	4 (16%)	3 (12%)

必要がなく、従業員の招聘、個人の見上調書の管理をしなければいけない。

「機能語的表現」

- (26) しかし、社会の発展につれ <*○→て>, これからどうなるかは、私たちも注意しなければならないだろう。
- (27) 色彩語は両国の文化交流を通じ <*○→て>, 影響し合い、ともに発展してきたものだろう。

「連用形が一拍になるもの」

- (28) 彼らのうち、最初にあちら側にやってき <*○→て>, そこを「1Q84」の世界と名付けたのは青豆の方である。
- (29) チャーハンは米、野菜や肉などを素材とし <*○→て>, 同じ大皿に盛り付けます。

「因果関係あり」

- (30) もし日本語の授受動詞を全部書けば、内容が多すぎ <*○→て>, 問題点も明らかに書くことができない。
- (31) はじめてそんなに多くの日本人と交流するので最初は緊張し <*○→て> ときどきしました。

「まとまりの捉え方」が不使用全体の過半数を超えていることが、それらは (23) ~ (25) のように「だ・である体」である。一つの文の中に「テ形」と「連用中止」が共存している例として、新川 (1990) では、「第一なかどめ+第二なかどめ+定形動詞」, 「第二なかどめ+第一なかどめ+定形動詞」, 「第二なかどめ+第一なかどめ+第二なかどめ+定形動詞」が挙げられる。また、三原 (2015) は「連用形」を続けて用いるより、随所に「テ形」を挿入すると、文章の安定度が向上すると指摘し、「連用形+テ形+定形動詞」, 「テ形+連用形+定形動詞」, 「テ形+連用形+テ形+定形動詞」, 「連用形+テ形+連用形+定形動詞」, 「連用形+連用形+テ形+定形動詞」の五つのパターンを挙げている。学習者は固い文章を書く際、「連用中止」で区切りをつけるという意識を持っていたとしても、連用形と「テ形」を交える状況までは判断できず、「テ形」を使えていないと考えられる。

4.2.3 不使用における形式上の傾向

不使用においても過剰使用と同様に、読点の「,」を打つかどうかによって異なる傾向が見られる。表5のように不使用の25例のうち、読点の「,」を打ったのは21例あるが、「,」を打たなかったのは4例しかない。

表5 「並列節のテ」の不使用における形式上の傾向 (n=25)

「P, Q」	「P Q」
21 (84%)	4 (16%)

表5に示した通り、不使用においては、「P, Q」が21例 (84%), 「P Q」が4例 (16%) 認められる。「P, Q」の例は (2), (20) から (30) まで示された通りであり、「P Q」の例は (31) のほかに、(32) と (33) に挙げておく。

- (32) 多くの場合、作家は色彩語を使用し <*○→て> 自分の気持ちを表示する。
- (33) 本論文は在日留学生のアルバイトに着目し <*○→て> 調査を行い、市場の現状と今後について分析した。

過剰使用と同様に、学習者には、節と節の間に「,」を使用するという傾向が見られる。区切りが感じられ、「連用中止」を使用することが窺える⁵⁾。

4.2.4 まとめ

「並列節のテ」の不使用については、次のようなことが言える。

- ① 文の接続を「テ形」に頼っている傾向があるとこれまでしばしば指摘されているが、「テ形」の不使用が確実に存在している。
- ② 「並列節のテ」の不使用の誤用パターンについては「まとまりの捉え方」, 「因果関係あり」のような意味用法に関する誤用もあれば、「機能語的表現」, 「連用形が一拍になるもの」のような前件の述語のみに関する誤用もある。

- ③ 「まとまりの捉え方」はいずれも「だ・である体」であり、誤用例全体の過半数を超えている。また、形式上過剰使用と同様に、前後件の間に「,」を打つという傾向も見られる。これらは学習者が固い文章を書く際、「連用中止」で区切りをつけるという意識を持っているからと言える。
- ④ 学習者は連用形と「テ形」を交える状況が判断できず、「テ形」が使えていないと考えられる。

5 おわりに

『YUK コーパス』から抽出したデータをもとに、「並列節のテ」の過剰使用及び不使用について考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- ① 「並列節のテ」については、過剰使用が不使用の約12倍現れているように過剰使用が起こりやすい。他方で、文体上の傾向として「だ・である体」に集中している共通特徴がある。
- ② 過剰使用の誤用パターンとしては、並列（「前件そのほかに後件」と「分離提示」）、継起（「前後に連続性なし」）、対比（「テーマによる一体性の欠如」と「形式的類似性」といった3種5類が挙げられるが、その6割以上は並列が占める。
- ③ 不使用の誤用パターンとしては、「機能語的表現」、「連用形が一拍になるもの」のような前件の述語に関わるものもあれば、「まとまりの捉え方」、「因果関係あり」のような意味用法に関わるものもある。「まとまりの捉え方」による不使用が誤用例の過半数を占める。
- ④ 過剰使用と不使用には、形式上の傾向として、読点の「,」を使用した誤用例が多くを占める。この読点は学習者が読点の前後に区切りがあるという意識を持っていることを示している。その際、過剰使用は「テ形+読点」を使用することで、学習者は「読点」で節と節との間に区切りがあることと同時に、「テ形」でその両者が繋がっていることを表している。不使用は、学習者が「連用中止」と「テ形」を交える状況を判断できず、「テ形」が使えていないことを示している。

【注】

- 1) 吉田 (2012: 1) では、「テ形」は動詞の連用形に「テ」が接続した形であると述べている。本稿では、「動詞連用形+テ」を指す時、吉田 (2012: 1) を参照し、「テ形」を用いることとする。
- 2) 市川 (1997: 452) は「連用中止」が動的事態の

並立表現を表す場合は、動詞「ます形」の語幹が使われると指摘している。この用語については、生越 (1988)、中俣 (2005)、林 (2007)、三原 (2015) では「連用形」、新川 (1990) では「第一なかどめ」、益岡 (2013) では「中立形」が使われているが、本稿では市川 (1997) の用語を採用ことにする。

- 3) 本稿では、過剰使用と認められるものには、(3) のような <*歌って→歌い>、(4) のような増え <*て→○> との二つのパターンがある。この二つの違いは活用によるものなので、本稿では同一に扱う。
- 4) 生越 (1988) によると、「主任が山口へ行って、係長が広島へ行った」という文が現れ得る条件として、文脈においてあるテーマが設定され、そのテーマ主導によって前件と後件の一体性が示される。
- 5) 戦 (2002: 73) では日本語の文や語句は用言や助動詞の語形変化によって切れるところを示すことが可能であり、「連用形」が用いられた時は読点のような区切り符号の助けがなくても、誤解される心配がないと指摘している。他方で、小学館辞典編集部 (2007) では、語句の切れ目を明瞭にするために、「読点」が用いられる場合として、連用形や体言などで文を一時中止することが指摘され、その例として、「右手を上げ、同時に左脚を上げる」が挙げられている。これは母語話者が「連用中止」の後ろに「読点」を打つことを裏付けている。学習者に見られる「連用中止」の後ろに「読点」を打つという傾向が、日本語のこのルールに従っているのか、それとも中国語からの影響なのかについては、今のところ明らかではない。

【参考文献】

- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』, 凡人社.
- 生越直樹 (1988) 「連用形とテ形について」『横浜国大 国語研究』6, 62-71.
- 草薙裕 (1985) 「文法形式が担う意味」草薙裕他『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店, 1-38.
- 小学館辞典編集部 (2007) 『句読点, 記号・符号活用辞典』, 小学館.
- 新川忠 (1990) 「なかどめ-動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい-」, 言語学研究会編『ことばの科学』4, むぎ書房, 159-171.
- 戦慶勝 (2002) 「中日両語における句読点の照らし合わせ」『国際文化学部論集』3, 69-77.
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点-不自然さ・わかりにくさの原因をさぐ

- る。」『日本語教育』85, 25-37.
- 中野はるみ (1997) 「シテ形接続と連用形接続の使用
の実際—中級日本語学習者指導のために—」『留
学生教育』2, 105-119.
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系』, ひつじ書房.
- 林雅子 (2007) 「動詞のテ形と連用形の使用差に
関する計量的調査研究—新聞・論述文・小説に
おける語彙調査の結果から」『龍谷大学国際
センター研究年報』16, 49-58.
- 半藤英明 (2006) 「『て』の接続機能」, 『国文
研究』51, 11-21.
- 益岡隆志 (2013) 『日本語構文意味論』, くら
しお出版.
- 三原健一 (2011) 「テ形節の意味類型」『日
本語・日本文化研究』21, 1-12.
- 三原健一 (2015) 『日本語の活用現象』, ひつ
じ書房.

- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書
店.
- 吉田妙子 (2012) 『日本語動詞テ形のアスペ
クト』, 晃洋書房.
- 吉永尚 (2012) 「テ形節の意味と統語」, 三
原健一 仁田義雄編『活用論の frontline』, くら
しお出版, 49-58.
- 于康 林璋 于一乐等 (2017) 《日语格助词的
偏误研究(上)》浙江工商大学出版社.

【付記】

本稿は、2018年度湖南省社科基金外语科学联合项目
“日汉省略现象的认知对比研究”(課題番号:18WLH14)
の助成を受けて行った研究成果の一部である。
(主指導教員 佐藤暢治)